



TITLE:

農業生産共同組織の展開,構造,運営  
に関する研究( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

吉田, 博

---

CITATION:

吉田, 博. 農業生産共同組織の展開,構造,運営に関する研究. 京都大学,  
1976, 農学博士

ISSUE DATE:

1976-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/221112>

RIGHT:

氏 名	吉 田 博 よし だ ひろし
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 622 号
学位授与の日付	昭 和 51 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	農業生産共同組織の展開、構造、運営に関する研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 頼 平 教 授 上 村 恵 一 教 授 菊 地 泰 次
--------	--

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は農業生産共同組織について、つぎの三つの課題を総合的に究明したものである。

第一の課題は、農業生産共同組織の展開メカニズムを明らかにすることである。生産共同組織には、制約条件の変化に適応して展開し、短期のサイクルでもって解体する適応型が多くみられるが、なかには革新的な技術や組織方法を採択し、同時に成員間の分配面の均衡を維持しながら長期にわたって存続する発展型の生産共同組織もみられる。第1章、第2章はこれらの生産共同組織の展開メカニズムを究明している。

第二の課題は、農業生産共同組織の構造と組織原則を究明することである。農業生産共同組織の大部分は伝統的な村落共同体に基礎をおいて組織されたものであり、同質的な成員条件を備えているが、これは均等出役・出資・分配という組織上の平等原則と不可分の関係にある。第3章、第4章はこれらの組織原則について究明している。

第三の課題は、生産共同組織の運営上の中心問題である分配とリーダーシップをとりあげて、分配の決定要因と組織リーダーの役割を解明することである。第5章と第6章がこれにあてられている。

以下、章別に主な内容を要約しよう。

第1章では「適応の生産共同組織」として果樹産業の生産共同組織をとりあげている。果樹産業が発展段階から停滞段階に移行するにつれて、生産共同組織の主な役割は、生産規模拡大から生産費節約へ移り、さらに生産物の品質向上と標準化へと転化する。この展開過程において生産共同組織は、各成員の獲得する組織化利益とその成員間格差の合成和がプラスになるように運営されねばならないことを明らかにしている。

第2章では「発展の生産共同組織」として養鶏共同経営をとりあげ、それが企業者的リーダーの強力な指導のもとに、孵卵と種鶏の両部門間の垂直型合同、新品種の開発、組織機構の弾力的な変革によって飛躍的に発展していくメカニズムを究明している。

第3章では、生産共同組織において、成員条件の同質性とその形成と存続にとって重要な役割を果たしているが、共同組織の発展に際しては、かえって制約要因として作用することを実証している。

第4章では、農業共同経営における平等原則の意義を検討し、それが成員の経済的均等性と社会的平等性を保証し、人格的結合力を強めて組織の存続に寄与するのであるが、その反面、出役、出資、経営管理の各局面で制約要因として作用し、組織の発展を阻害する傾向があることを解明している。

第5章では、水稻集団栽培における出役報酬の決定要因を分析し、伝統的・地縁的要因と集落内出役労働に対する需要独占によって出役報酬水準が低く決定されがちであること、また中核的成員の報酬上の満足度の如何によって集団栽培が維持または転形、衰退の可能性をもつことを究明している。

第6章では、農業生産共同組織の発展に対して組織リーダーの果たす役割を分析している。組織目標を達成するためには、革新的技術と資金を導入し、成員の意欲を刺激し創意工夫を発揮させる体制づくりが必要であるが、平等原則に基づく分配方法では、これらの成員能力を発揮させる誘因にならず、これを補うものとして、高い目標や理念の設定と浸透が、創意の動機づけに重要である。

さらに組織維持については、すぐれたリーダーがその企業者能力と卓越した人格によって組織結合の中心になり、成員間の分配の公平を図り、また単なる和をこえた共存理念によって分配をはじめとする各種の不満を緩和し、組織の目標達成と発展に寄与していることを実証的に明らかにしている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、農業生産共同組織の展開、組織、運営について実証的に究明し、その経営理論を樹立しようとしたものである。従来、農業生産共同組織については、階層分解論の立場から構造分析が行われているが、本論文のように組織成員の主体的行動に着目し、生産共同組織の管理論を確立した研究業績はほとんどみられない。

いま本論文の評価すべき点をのべると次の通りである。

(1) 生産共同組織の形成・発展・変質・衰退という展開過程を説明するに当たって、組織成員の主体的な行動に関連づけて分析する研究方法を用いている。そのために、農業経営理論の援用だけでなく、一般経営学、社会学、社会心理学などの蓄積を生かして、学際的に農業生産共同組織理論を構築しており、その意味において先駆的な業績であるといつてよい。

(2) 農業生産共同組織は一方において能率や収益性を追求し、個人単独では獲得できないような組織化利益の実現をねらっている。その反面、平等原則の支配する人格的な結合体であり、組織化利益の成員間格差が少ないことが望まれている。さらに自成的なゆるい結合体であるだけにたえず解体の危険にさらされており、すぐれた組織リーダーの企業者能力と献身的な尽力、および単なる和を越えた共存理念に裏づけられた人格的結合の強化がなくては、発展はおろか存続さえも困難である。このように収益原則と平等原則のバランスの主体的形成に共同組織存続の要件を求め、それを実証した点は高く評価される。

(3) 生産共同組織は各種の条件変化に適応してたえず変化し、展開していくものであるが、本論文は、稲作、園芸、畜産を主幹部門とする様々な経営形態について、その主産物の需給動向の変遷、政策条件や兼業条件の変動に対応して、生産共同組織が動態的に組織の機構と運営方式を適応させながら変形し、一

方においては役割を終えて解体していくメカニズム，他方においては，共同組織における成員の機能を異質化し，収益原則を優先させながら発展していくメカニズムを克明に分析している。

(4) 組織形態が高度になり，持続性を要求されるほど，共存理念によって組織の弱点を補い，人格的結合を強めることが必要になり，この機能を果す組織リーダーの役割が重要になるのであるが，農村や農民の社会的性格が，リーダーの育成について抑制的にはたらく点を明示している。

以上のように本論文は，農民生産共同組織理論の構築に関して幾つかの新知見を得たものであり，農業経営学の研究ならびに農業の実際面に寄与するところが大きい。

よって，本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。